抑是ハ唐乃太子の賓客白楽天
とは我事なりさても是よりわ
東に當つて國あり名を日本と
名付く急ぎ彼の土に渡り日本の智
恵を計れとの宣旨に任せ只
今海路に赴く　舟漕出て日の
本とのくづるゝ國を尋ぬる

東海の波路をはるかにのぞく
浦ゞのね乃影残る雲路横ぎる乃
天津空月もさし出ほのぼのと
出かくしめて旗もなびかば李の
地よも暮よりわく
詞 海路を
へて急ぐ旗よ見えけやね乃
地よそほひ所は旗をおろし

ば李乃やうをはるかやと思ひよ
ミテ一セイ
志ろぬひのはくし乃海のあさき
わく冬月かつ残るぎ きらの影
サシ
激水下せくくとして鴻浪天を
ひうご越をいもとりむまりの
扁舟よ棹をうち浮かべ五湖の
りふかの波の上ぞのなやと思ひ

たゝなる楽天とかやらんこそばの
遊ぶまであはやらましき里方ぞ
漢土乃人なれば詩を作りて
日本小仲使隠あ字社は中あわ
詩を以はやはゝともがらろし
やりたい見知るのあるへきさらと
とも思ひまじば本の智恵を

ちからなきとそれ楽天東至たまのふ
へきとのやえぞあるまきねの
本に西を証めてかよ乃あわ
ふかひかり見ゆまほひとさとに
ひりや羽袖そんはくしる
いやく吹松浦潟波わ
みえて隔なる唐船のりし人を

楽天とゐへる事見はうそしめ
唐へ渡むはしやきとさやく
唐人なれは詩と云ふ事をもとゝも
哥も志らぬ事うう悉よし那はわ
棹の以とまはや鞠をもとむく

ワキ詞
猶ゝ見ぬへ来るあつとの無我を付
うん海はいは日本中は日ことを

シテ詞
もそもうふう　きさ唐土よは
日本をもて何うひ初ひとう

ワキ
唐土に詩を作りて遊ぶよ

シテ
日本には哥を詠みて人乃心を
慰さき候へは

ワキ
そも歌とはいつふ

シテ
天竺の霊文を唐土乃詩賦とし
唐土の詩賦をもて我朝の

歌もたゞこの人は苔衣きるは
時ハ風をもなくてきぬく
山がら帯をするかしきや那
思ハ祖が漁翁なめりかく心
の詠哥をゆうめるぞ男いりう
那る人や／＼人のましや那
如もなく光まわぞ我哥を詠
すぞ人のよほるへしこ生
とし生物毎よ哥をよまぬも
なきも呂をそもめいきとし
以光陀光とぞそハ自然音聲
さも和歌をなける思ためし
和國をいつて和哥ほし
花小なく鶯水に住めの蛙まで

おしろの國も動じ弥代
きのふみ山陰がり清水乃
あをき海の波乃聲の海青楽
西乃海あをきが原が波間より
現れ出でしすみよし乃神住吉の
神住吉の現れ出でし住吉乃
住よし乃神が力の影ろ世雖ハ

よわね哉随へさゞ波は
ぼうやうふ浦の波立返へし
未天　住吉現一然度く
伊勢石清水賀茂春日鹿島三島
諏方熱田安藝乃嚴嶋の明神ハ
娑竭羅龍王乃第三乃姫宮にて
海上にうかむて海青楽を奏

船ならバ大龍王乃
めなうまし四海にかくわつて
ずひあふ小長衣乃ごろ猪神
風よ幾とゝまりて虎船ハ愛
よわ漢去よ国里くわ実せ系や
神ご君実き数や神と君りよ系
うこう然国うめくゝ幾く